

湯浅先生から教えていただいたこと

細 田 枝 里

大学四年生になると同時に、渋谷キャンパスでの学生生活が始まりました。新しいキャンパス、まっさらな匂いのする教室にて、初めて湯浅先生にお会いした日のことを鮮明に覚えています。大学四年生のゼミでの一年間、そして大学院生としての二年間、私は先生にご指導いただいた言葉が持つ力を教えてくださいました。

先生からお話を伺うたび新たな視点を得ることができ、学生時代の学びは大変充実していました。ユニークな一面もある、親しみやすい先生のお話に引き込まれ夢中になりながら、自分の中にある知識に対して理解が深まっていく喜びも感じました。先生のお話から、自分の知らない日本語の世界を見てみたい、日本語についてもっと考えたいと

いう思いが生まれました。そしてそれは今も、自分自身の興味として持ち続けています。

卒業論文の執筆は、学生時代の良き思い出として私の中に残っています。テーマを決める段階から迷ってしまったため、仲間が自分の決めたテーマでどんどん前に進んでいく一方、私は遅れをとってしまいました。しかし、先生は私を急かすことなく、私が納得してテーマを決めることができるまで見守ってくださいました。思えば、論文というものに向き合ったのは、そのときが初めてでした。素材の探し方や扱い方、論文を書くことに対する心構えを先生から教えていただいたからこそ、卒業論文を書き上げることができたと思っています。

その後、進学し、修士論文の執筆に向けて過ごす日々は、

順風満帆ではありませんでした。ついこの間までは大学生で、仲間と和気藹々と研究をしていたのに、その日々とは明らかに異なる空気を感じ、圧倒されていました。大学院生とはこんなにも孤独なものなのかと思うこともありました。

自ら望んで進学を決めた一方でなかなか思うように進まず、自信が持てない毎日が続き、研究の意味を考えると後ろ向きになってしまうという時間が多くありました。そんなとき、研究室に伺えばいつも先生が温かく迎え入れてくださいました。とりとめもない私の話に耳を傾けてくださる、それだけで救われていました。「意味のない研究はありませんよ」という先生のお言葉で心が晴れていったことを今でも覚えています。

悩みながらも、私自身が自分の思いを尊重するように、そして自由に、何より目一杯やりきることができるよう、先生は親身になってご指導くださったので、私はその後、修士論文も書き上げることができました。思い悩んだことも辛かったことも、先生が宝物に変えてくださったのだと感じています。研究に向き合い続ける苦しみと喜び、そういった影も光も、先生から教えていただきました。

学生時代を思い返すと、そこにはいつでも優しい先生の、温かなお言葉があります。先生のように誰にも温かい言葉

をかけることができる自分でありたいと思い続けて、社会人である今を生きています。先生のお言葉やご指導があり、今の私がいます。あの頃も、そして今も、先生は私を支えてくださっています。

湯浅先生へ、心からの感謝と敬意をこの文章に込めて。

(ほそだ えり・平成28年度修了生)